

バスを降りると、潮の香りが風に乗って僕の鼻腔をくすぐる。僕より先にバスを降りた林藤先輩は「海って本当に青いんだね」と目の前に広がる青い海を指差しながらはしゃいでいた。

「そんなに海に来るの楽しみだったんですか」

海岸へと出る道を横に並んで歩きながら、僕は林藤先輩に訊ねる。潮風に吹かれて、頭上にある木々が心地よい葉音を奏でていた。

「楽しみに決まってるじゃん、だって初めて来るんだよ？」

「初めてだったらもう少し緊張しませんか」

僕と林藤先輩は文芸部の先輩と後輩という関係性で、部活以外の場所で会って出掛けるのは初めてのことだった。

彼女と海に行くきっかけになったのは、部活が終わって下駄箱に向かっているときに「この年で海に行ったことがないの？」と林藤先輩とその友達が話している姿を目撃したからだ。盗み聞きしたつもりもあとをつけたわけでもないけれど、入部当初から憧れている彼女と話してみたいと思いい海に誘うと、いいよ、と笑顔で答えてくれた。

「緊張ってどういう意味の緊張？」

眉をひそめて分からないという顔をしたあと「あ、日向ひなたくんと来るっていうこと？」と今度は何かを閃いたような明るい顔をした。

「違います、そういう意味じゃなくて」

「じゃあどういう意味？」

「……なんでもないです」

本音を言うことが恥ずかしくなり、僕は自分から話題を切り上げる。「憧れ」という特別な人として見ていたのはどうやら僕だけらしく、彼女は楽しみのほうが勝つみたいだった。

「さては日向くん、遠足とかの行事は楽しみより緊張の方が勝つタイプなんだね」

なるほど、と納得したような顔で彼女は僕の顔を覗き込んだ。

「そういえば、なんで日向くんは私を海に誘ったの？」

海岸沿いの階段に腰掛けながら、林藤先輩は僕に訊ねる。

「少し前に海に行きたいって話していたのを聞いたので」

僕が文芸部に入部したきっかけは、彼女の『泡沫』という詩を見たからだ。綺麗で美しく儚くて、僕は彼女の描く詩をもっと見てみたいと思った。そんなことを、彼女には口が裂

けても言えないけれど。

「ちなみにここでウエイクボードってできる？ 船に引っ張れながらボートに乗るやつ」

隣で彼女が両腕を伸ばし、軽く手を握って左右に揺れる動作をした。僕はそれがウエイクボードの乗っている動作を真似していることだとすぐに分かって、「それは無理ですよ」と否定する。

「やるなら事前に許可がいります」

海を眺めながら呟く彼女を見ながら、僕は林藤先輩の質問に答える。

「ええー、海だからできると思ったのになあ」

脚を伸ばしながら唇を尖らせている彼女を見て、僕はふとあることを思い付く。「でも」僕は呟いて、ローファーと靴下を脱いで立ち上がる。太陽の光を浴びた浜辺は少し温かくて、それは小さい頃に遊んだ海を思い出させた。

「水の掛け合いくらいならできますよ」

事前の許可が必要なく、今すぐできる海の遊びと言えばこれくらいだ。振り返りながら声を掛けると「それ早く言ってよ」と嬉しそうに笑って、ローファーと靴下を脱いで僕のもとへ駆け寄ってくる。心地よい潮風で靡いた茶色の髪が綺麗だった。

「ねえ、これ日向くん押し倒したらどうなるかな」

水を掛け合いながら、不意に林藤先輩が僕に訊ねる。真面目そうなイメージとは違う自由な彼女に混乱しながらも、僕は答える。

「そりゃあ、濡れますよ」

「あはは、だよ。海に押し倒してもいい？」

楽しそうに林藤先輩は再び訊ねる。その姿は部室では見せない彼女の姿に、少し新鮮さを覚えた。

「嫌ですよ。濡れるじゃないですか」

「浅いから大丈夫だよ」

「いや、そういう問題じゃ——」

そうは言っても僕が着ているのは制服だ。濡れることは百歩譲っていいとしても、帰りは制服が乾くまで待つていなければならぬ。さすがにそれは嫌だと拒否して、でも予想に反して近づいてくる彼女に、僕は後ずさりをする。近いと思ったその瞬間、林藤先輩は僕の左手首を掴み、グッと引き寄せる。目の前には彼女の企む顔があった。

「海ってそういうものでしょ」

そう言って微笑んだ彼女は、僕の両肩を押した。力はそれほど強くなかったけれど不意に近づいてきた彼女のせいで、僕はバランスが取れなかった。気付いた時には海辺で尻もちをついていた。水に濡れたズボンの感触が気持ち悪い。

「ごめん、本当に倒れるとは思わなくて」

頭上で林藤先輩の謝る声が聞こえて、僕は彼女を見上げた。心配そうな顔をしながら、彼女が手を差し伸べている。

「……あ、いや、大丈夫です」

林藤先輩の手を取りながら、僕は立ち上がる。さっき水を掛け合ったせいか、彼女の手は冷たかった。

「でもこういうのって楽しいよね」

さっきの謝りを否定するかのようになり、彼女は思い付いたような顔で呟いた。

「僕は全然楽しくないです」

「日向くんも楽しそうに笑ってたよ」

顔を覗き込みながら彼女は僕の顔を見ただけで、そのことについては反応しないことにした。多分、僕は笑っていない。そんなことを隠すように、僕は首に手を当てた。

「ほら、あっちで休もうよ」

そう言って林藤先輩は僕らの靴が置いてある階段を指差し、僕の左手首を掴んで走り始める。僕の手を引っ張る彼女の背中からは、少しだけ大きく見えた。

「日向くんは将来なりたいものってある？」

階段に座って海を眺めていると、隣から林藤先輩の訊ねる声が聞こえた。

「どうしたんですか、急に」

唐突な質問に、僕は思わず林藤先輩の顔を見る。彼女は僕を押し倒した時とは打って変わって、神妙な顔をしていた。

「んー、まあなんか気になってさ」

珍しく曖昧な彼女に混乱していると「それで、どうなの？」と不思議そうに訊いてきた。

「……まだ分からないです」

一年生の僕はまだ学校に慣れるのに精一杯で、将来のことはまだ考えてなかった。彼女との会話が終わってしまうことに申し訳なく思っていると「そうだよね、私も入学当初はそん

な感じだった」と微笑んでくれて、少しだけ安心する。

「私ね、臨床心理士になりたいんだ」

「……なんですか、臨床心理士って」

聞き慣れない言葉に、僕は聞き返す。少しだけ冷たい潮風が、僕らの間を通り抜けていく。

「まあ、少し違うけど身近な言葉で言う和心理カウンセラーみたいなものかな」

そう呟いて、林藤先輩は目の前に広がる海に視線を移す。

「中学生の頃にお世話になったカウンセラーの先生が居ただけど、その人にずっと憧れていたの」

海を見ている彼女の横顔は、懐かしい景色を眺めているような優しいものだった。林藤先輩が眺めている景色の先には、かつて憧れた先生の姿が浮かんでいるのだろうか。

「仕事だから当たり前なんだけど、私が悩みを相談しても嫌な顔ひとつせず話を聞いてくれたり、アドバイスしてくれたりしてくれたことが本当に嬉しくて。救われたって言っても過言じゃないくらいなんだけど」

ふと言葉を詰まらせ、彼女は不安そうな顔をした。声を掛けようとしたけれど「なれるのかなって最近考えてて」と言葉を続けたので、僕は黙って再び話を聞く。

「仮に臨床心理士になれたとしても私自身がその人を救うことが出来る保証はどこにもなくて、それなら違う仕事に就いた方がいいんじゃないのかなって思ってた。だからって言うわけじゃないけど、海に行ってみたかったんだ。青くて広い海に行けば、私のこの悩みもちっぽけに見えるのかなあって思って……なんかごめんね、変な話しちゃって」

申し訳なさそうに謝る彼女を見て、ふと脳裏に林藤先輩が書いた詩を見た日の事を思い出した。

部活見学の日、どこにも入部する気もなかった僕は、放課後部活の話で盛り上がっている生徒達の間を通り過ぎて、下駄箱へと向かった。靴を履きながら出入口に差し掛かった時、ドアに紙が貼っていることに気がつく。靴を整えながらなんとなく紙に印字された文字に目を通すと、そこにはタイトルと名前、詩が載せられていた。

綺麗だということ以外、何も考えられなかった。

林藤先輩の詩に魅了された僕は、その日のうちに文芸部に入部届を提出した。

「先輩が書いた『泡沫』っていう詩、よかったですよ」

言わないと決めていたはずなのに、気が付けばそんなことを口にしていった。

君は私の隣を歩いている
綺麗って呟いて君は群青色と茜色が残る空を見上げる
その横顔が儂かった

君は微笑む

この曲聴いてみる？と言ってイヤホンから溢れ出ていた
その音が愛おしかった

君は立ち止まる

泣かないでよと言って涙を拭ってくれた君の指先
思わず両手で握りたくなるほど冷たかった

君は見つめる

いつか見せたいものがあるんだと言った
その瞳は輝いていた

「……日向くん、あれ読んだの？」

彼女は驚いたような顔をして、僕に体を向けてくる。しまった、と思ったけれど、それはもう手遅れだった。

顔を覗き込む彼女と目が合わない様に僕は海を見ながら「それはまあ、文芸部の一員として」と読んでいても怪しまれない理由を口にした。緊張しているのか、鼓動がいつもよりうるさく感じる。僕は首に手を当てた。

「僕は『泡沫』を読んで救われましたよ」

言ったからには全て伝えなければ意味がないと思い、彼女にバレない様にいつもより少しだけ多めに息を吸って、ゆっくりと吐き出す。僕が吐いた言葉は恋愛における告白のようなもので、伝えるならそれなりの覚悟が必要だった。緊張を少しでも和らげようと、もう一度息を吸って、ゆっくりと想いと共に言葉を紡ぐ。

「僕があの詩を書いたとしても泡沫なんてタイトルを思い付かないですし、どの詩を切り取ってもちゃんと情景が思い浮かびますし」

詩に出てくる『君』は『私』よりもきつと背が高いのだろう。そうならば『君』は多分男性で、イヤホンを差し出しているということは多分互いに音楽が好きなき者同士。『君』が立ち止まって涙を拭うけれど、言葉とは裏腹に『私』を包み込むはずの指先は冷たくて、『私』は哀しくなる。関係性も恋人に一番近くて同時に一番遠い存在なんだろう。

そんなことを、『泡沫』を見て感じた。

「詩が綺麗な人って心も綺麗だと思っんです」

僕は今まで彼女が歩んできた人生も、見てきた景色を知らない。でも、誰もが出来る言葉を紡ぐという行為で、彼女は人の心を引き付けるような詩を書いてみせた。これは僕の想像だけれど、きっと彼女の見てきた景色は綺麗だったんだと思う。

「そうかな」

不安そうに見つめる林藤先輩の背中を押すような言葉を、必死で考える。

写真も絵もない文字だけの情報で、あんなにも情景が浮かんで綺麗だと思ったのは彼女の詩が初めてでした。

そんなことを伝えたいけれど、その言葉たちはこの場には相応しくないような気がして、伝えることが出来なかった。少し離れたところで引いては返す波の音がする。

「だから、その……なんて言うんですかね。正直憧れますよ。どんなふうに世界を見ていたらそう感じるんだろうって」

「……なら、やってみる？」

突然の彼女の提案に、僕は理解が出来ず「……やるって何をですか？」と聞き返す。すると林藤先輩はゆっくりと立ち上がり、

「私を書いた『泡沫』を二人で再現するの」

と海を背にして僕の前で両手を広げて見せる。その表情はさっきより少しだけ明るくなっている気がした。

「でも、どうやって」

林藤先輩が言っていることがよく分からなかった。『君』と『私』それぞれに役を分けたとしても、僕と彼女で描いている世界は違う。表現できるのだろうかという不安な気持ち顔に出ていたのか、僕の顔を見て「私が指示するから、日向くんはそれに合わせて動いてくれ

ればいいよ」と楽しそうに笑った。

「そうしたら、少しでも私が見ている世界が見えるでしょ？」

「……まあ、そう、なんですかね」

確かに見てみたいと言ったけれど、実際にそれを言うか言わないかは別の話のような気がする。やっぱり彼女は自由な人だと、首に手を当てながら思う。

「日向くんは青空の下で海を眺めていて、イヤホンを私と分け合っているの」

そう言って林藤先輩はポケットの中からスマホとイヤホンを取り出し、僕に渡した。スマホに巻かれたイヤホンをほどいて、「と書かれたイヤホンを林藤先輩に渡し、僕は右耳に装着させる。一瞬だけ触れた彼女の指先の冷たさが、少しでも僕の指先の感覚に残る。温かい潮風は僕らの髪を靡かせ、遠くに聞こえる波の音が心地よかった。

「……どうだった？」

一時して、左耳に付けていたイヤホンを外しながら林藤先輩は訊ねる。

「……なんか、綺麗ですなやっぱり」

「やっぱり？」

スマホを受け取りながら、林藤先輩は僕の顔を見る。その顔は不思議そうだった。

「僕、ずっと先輩の詩を読んだ時から綺麗な詩を書くなあって思ってたんです。触れたら消えてしまいたいそうなの、それこそ泡沫みたいな」

いつの間にか落ち着いていた鼓動が、再びうるさくなっていく。

「そんな綺麗な詩を書く人が人を救う仕事に就かないなんて勿体ないと思うんです。後輩が何言ってるんだって感じですけど」

恥ずかしくなって僕は首に手を当てる。落ち着かせようと深呼吸をしていると「ねえ、日向くん」と僕の名前を呼びながら林藤先輩は立ち上がった。

「もう少しだけ遊ぼうよ」

少しだけ寂しそうに呟いて、でもどこか嬉しそうに見えた林藤先輩は僕に手を差し伸べた。僕がその手を取ると、彼女は再び海辺へと駆け出した。

一瞬だけ繋がったあの白いイヤホンに、彼女は何を思っただろう。僕と同じ感情を抱いていて欲しいというのは、少しでも我儘かもしれない。

でも確かにあの時彼女と見た海は絵に描いたような青で。

イヤホンを受け取った彼女の指先は少しだけ冷たくて。

微笑んだ彼女は太陽みたいに温かくて。

それらすべてが綺麗だった。

思い出になるにはあまりにも彩度が高すぎて、まるで夢なんじゃないかと錯覚するくらいに。

「林藤先輩」

遊び終わった後、荷物を取りに行こうとする林藤先輩の背中に呼びかける。振り返りざまに少しだけ茶色の髪がふわりと靡いて、彼女と目が合う。

「きっと臨床心理士になれますよ。先輩なら大丈夫です」

世界に二人しか居ないような空間で、僕は今までで一番綺麗な青を見た。その青を覚えていた限り、僕らは何者だってなれるはずだ。詩で僕を救った彼女は、きっと臨床心理士の夢を叶えられる。僕を救ったように、彼女は目の前に居る誰かにもきっと手を差し伸べてあげられると、僕はそう、信じている。

「ありがとう」

僕の言葉を受け取った彼女は、今まで見てきた中で一番明るく自信に満ちたような笑顔だった。